

→パレード車に乗って夏祭り会場へ
向かうポスト(寝ている)

→西表島のビーチバイン



「ポストが西表島に漂着したとき、そこで勝手に縁を感じて、僕は運命的につながっているのかなと(注・BINGOと南三陸町は、かねてより音楽を通じて交流が続いている)。ちゃんと歌津まで届けて、ポストがつなげてくれた輪を、みんなで喜んでお祝いしよう」と



↑震災発生2時間前に、このポストに手紙を投函した人も祭りの会場を訪れました

ポスト、故郷に帰る(ご報告)

ボクらの目の前には、まだ傾いた建物や、途切れた道路が見えます……でも今日は、みんなで楽しくなりましょう!



すけさきた8月11日号でご紹介した「歌津復興夏まつり」。石垣市と竹富町から現地に応援チームが赴き、BEGINにもポストの里帰りを祝いました。

不定期掲載

さやかな 復興のうた

被災地の怪談

仙台市内のタクシー運転手の男性は、もう三度も「幽霊」に乗せたことがあるという。客が「閑上(ゆりあげ)まで」と行き先を告げる。宮城県名取市の閑上海岸は、震災の津波で壊滅した場所。あそこにはもう何もありませんよ、と言って振り返ると、誰もいない。「そんなときは、できるだけ近くまで走ってあげられますよ。きっと、帰りたいんだろうと思うから」

津波で亡くなった宮城県女川町の高齢女性の幽霊が、仮設住宅の住民を頻繁に訪ねる。住民たちは、もう死んだことを彼女に知らせるかどうか迷うが、「気の毒だからもう少しそのままにしよう」ということになったそうだ。

東日本大震災の起きた一昨年の秋ごろから、こうした怪談が、被災各地で伝えられるようになった。インターネットで怪談を募る仙台市の出版社荒蝦夷(あらえみし)代表の土方(ひじかた)正志さんは「震災の前と後で、怪談の質が大きく変わった」と指摘する。「震災を体験した人が、死者のサインを受け取り始めた。身近な者の死が愛着に結びつき、怪談話に供養や鎮魂の思いが込められるようになったんです」

被災地で語られる怪談の幽霊は、どこか心安くユーモラスな存在だ。むごたらしいホラーのような都市伝説とは明らかに違う。伝承されるうちに、人々が望む温かい物語に少しずつ変容しているとみられる。

土方さんは「怪談の力が、縁者の死に向き合う被災地の人たちの心を治療する働きを持つ。被災地で自然発生的に生まれている怪談を集めることで、心の復興に少しでも役立てば」と話す。

(東京新聞Tokyo web)

「横断歩道を渡る幽霊たちが日ごとに増え、静岡県警から応援に来ていた警官が、交通整理にでんてこ舞いをしてる」
(岩手県釜石市)

we support!
RQ
災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』
かめばん しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたるの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

SEPTEMBER
11
2013

